

令和3年度蘇南高等学校・年末全校集会の校長講話

対話する学びの大切さについて

校長 小川幸司

1 対話を重視した学習を進める

蘇南高校では、「対話をする学び」を大切にしています。授業において、先生が知識を一方向的に教授して、生徒がそれを丸暗記していただくだけの学びではなく、友人や先生との対話を通して、いかに物事を考えていくかという学びを重ねています。

先日、3年生の総合探究発表会を行いました。3年生全員が探究した結果についてポスターセッションをして、聞いている1・2年生が質問や感想を述べる形で対話をしました。そのあとは3つの班がオンラインでプレゼンテーションをして、蘇南高校につながってくださった全国の大学・高校・中学の皆さんからコメントをいただきました。後で、岡山大学特別学長補佐の小村俊平先生から次のような感想が届きました。

——3つの発表を拝見しましたが、どれも素敵でした。全体を通して感じたことは二つ。一つは、「私たちはすごいことをやっています！」という情緒的なアピールではなく、なぜ大切なのかの根拠を示していたこと。

もう一つは、保護者、地域、大学、他校等、様々なステークホルダーが参加していたこと。学校にとっては運営が大変ですが、一つの物事を多角的な観点から見つめ、アイデアを出すという点で素晴らしいです。

本校のアドバイザーをつとめている柴田けいきさん（中津川市坂下在住）はフェイスブックにこう書いてくださいました。

——全生徒の中で上記の3つが選ばれ、プレゼンテーションを行いました。内容もすごけりや聞いているメンツもすごい！オンラインで全国をつなぎ、地元中学校・福島県などの高校・国立大学の教授らが聴衆として耳を傾けました。そこに加えて私を含む7人のコンソーシアム委員や南木曾町の方々が評議しました。高校生のプレゼンはとても素晴らしかった。とにかく感動した蘇南高校なのでした。

このようにたくさんの方々が、蘇南高校の「探究して対話をする学び」を温かく応援してくださっています。

2 コンフォート・ゾーンを越えていくこと

ここでなぜ「対話」が必要なのかを考えてみましょう。

アメリカのミシガン大学ビジネススクールに、ノエル・M・ティシーという先生がいて、人間が学ぶことはゾーンを超えていくことであるという理論を提唱しました。とても有名な考え方なので、紹介します。

人間には、三つのゾーン（領域）があり、一番の基礎にあるのは、そこに身を置いていると安心・安全・快適を感じることができる「コンフォート・ゾーン（快適領域）」

です。そしてその外側には、自分にとって未知の領域でそこに足を踏み入れることはストレスになるのだけれど、そこに入っていくことで自分自身を成長させることができる「ラーニング・ゾーン（学習領域）」があります。そしてさらにその外には、自分にとって不安で混乱をもたらすばかりのコントロールできない「パニック・ゾーン（混乱領域）」があります。この三つのゾーンの中で、私たちに必要なのは、コンフォート・ゾーンの外へ踏み出して新しい何かに出会い、ストレスを乗り越えて自分を成長させていくことだ、とティシー教授は述べたのです。

人によってコンフォート・ゾーンの大きさはまちまちでしょう。普段、あまり人と関わり合うことが苦手で、コンフォート・ゾーンが小さめだと言う人もいるでしょう。それはまったく悪いことではありません。あくまでその人の個性です。そして人との関係においてコンフォート・ゾーンは小さいけれども、様々な本に挑戦することが好きだから、心の中のコンフォート・ゾーンは大きいという人がいるかもしれません。コンフォート・ゾーンの大きさは人によってまちまちで、一人の人間の中でも様々な観点によってその大きさは違ってくるものなのだと、私は考えています。

いずれにせよ大切なのは、コンフォート・ゾーンに留まっているだけでは、人間は成長しないということです。自分の殻を破って、人と出会い、対話をして新しい自分の考え方を獲得していくこと。そうして自分自身が他の人のコンフォート・ゾーンを広げてあげること。こうしたゾーンを他者と協働して「越えていく」ことが大切なのです。

学ぶとは、「踏み越えていくこと」です。そうして、普段の自分とはちょっと違う、新しい自分への旅が始まります。

3 パニック・ゾーンは避けるべきものなのだろうか

ティシー教授の理論だと、自分からとても遠くにあるパニック・ゾーンに行くと、ストレスが大きすぎて心身が不調になると言います。では、パニック・ゾーンはすべて避けるべきなののでしょうか。

たとえば、先日行った「ふるさと探究学・特別編」では、木村紀夫さんが未だ震災の傷が癒えていない福島の様子をレポートしてくださいました。そのなかで、原発事故の原因は東京電力にすべてあるのではなく、ひたすら便利さを追求してきた私たちにもあるのではないかという「重い問いかけ」をしました。普段の私たちの「快適な生活」の向こう側から届いた木村さんの問いかけは、言わば「パニック・ゾーン」からの問いかけであったのではないのでしょうか。私たちの快適さを大きく揺さぶる対話です。

しかしそもそも地球温暖化の現実そのものが、パニック・ゾーンからの問いかけです。私たちは、コンフォート・ゾーンのちょっと外側だけを見ているだけでは気づかない、遠い他者からの問いかけと対話をすることによって、「ラーニング・ゾーン」がより意味あるものとなるだというのが私の考えです。つまり、三つのゾーンすべてが大切なのです。

4 私自身の本の執筆を振り返って

この10月に私は『岩波講座世界歴史 第1巻 世界史とは何か』を岩波書店から出版しました。約300ページを10人の研究者とともに書き、全体の4分の1を占める総

説論文「〈私たち〉の世界史へ」を私が書きました。10人の論文は、私が丁寧に読み（査読と言います）、たくさんの再検討してほしい意見を見つけました。皆さんが、私の意見をもとにもう一度全面的に書き直してくれました。私の総説論文は原稿用紙約200枚の分量になりますが、私の担当編集者がその都度意見を送ってくれて、3回書き直して完成させました。さらにそれを岩波書店の校閲部という間違い探しのプロの部署が2度にわたり徹底的にチェックをしてくれ、本になったのです。

この本では、「人類が世界史をどのように考えてきたのか」というとても根本的なテーマを探究しました。人類4000年の歴史を探究することは、私にとってコンフォート・ゾーンを「踏み越えていく」ことでした。約2年の歳月をかけ、150冊余りの本を使って執筆を続ける中で、続きの思考がどうしても出てこなくて書けなくなるときが何回かありました。夜、布団に入っても書けない悩みが頭を駆けめぐり、何日も眠れなくなりました。日本の高名な研究者が書くべきものを、ただの高校教員が書くという挑戦自体が、そもそも無茶なことだったのだという後悔が、その都度心を満たしました。

そんな壁をどうして乗り越えられたと思いますか。

それは「他者との対話」のおかげでした。私が行き詰まったとき、「きっとできますよ」と友人や編集者が励ましてくれました。そして私と同じように10人の共同執筆者の何人かが苦しんでいました。途中までの書きかけの原稿を読ませてもらって、私が「先生の今書いているものはきっといいものになりますよ」と励ましました。人を励ますことで、不思議なことに自分が励まされました。こうして本当にたくさんの「他者との対話」を重ねながら、1冊の本ができました。ありがたいことに今までに重版して1万部が印刷されました。

現代社会では、デマや偏見に満ちた情報発信がSNSなどで繰り返されています。それらに対するリツイートもまた、情報を吟味することなく指先の小さな動き一つで行われます。思い付きの情報発信が氾濫する世の中だからこそ、「他者との対話」を経験して、吟味された情報発信が、大切なのではないのでしょうか。ネットの情報の多くは、コンフォート・ゾーンです。検索エンジンがかかっている使う人の好みにあわせた情報が上位に来るようにソフトが作動しているからです。ネット社会になって、人々の好き嫌いは極端になり、社会の対立がより激しくなったと言います。それを乗り越えていく学びをどう作っていくかが大切なのだと思います。

5 おわりに

令和3年の終わりに、皆さんと一緒に考えたかったことを振り返ります。

私たちは、コンフォート・ゾーン（快適領域）を踏み越えて学びたい。そのときに大切なのは、さまざまな他者と出会い、他者と対話をすることです。なぜならば、コンフォート・ゾーンから出ることを躊躇する私を、他者の声をもっと広い世界へ手を引いてくれるからです。そして自分自身もまた、他者の手を引くことで、一緒に世界に踏み出せるのです。

蘇南高校は「天白の丘の上から世界と対話する学校」です。

来年もまた、この学び舎で皆さんと対話できることを先生方みんなが待っています。

よいお年を！